

# 日曜寺子屋家族塾の取り組み 2

古川 秀明

## 勉強アレルギー

スクールカウンセラーをしていて、勉強に関する親の相談では「どうすれば子どもが勉強するようになりますか？」あるいは「どうしたら子どもの勉強嫌いが治りますか」ということが一番多い。

勉強に関する子どもの相談では「毎日勉強しろという親がうっとうしい」ということが一番多い。

両者の話を聞いていると、小学校の高学年あたりから「勉強」という言葉を聞いただけで拒否反応を示す子どもと、なんとか勉強させたいと思う親のイタチごっこが繰り返されていることがよくわかる。

親の側の言い分としては子どもが勉強するのは当たり前で、勉強をするように我が子に言うのは親の愛情でもあるので、わが子の将来を考えても間違ったことは言っていないということだ。

子どもに向けられるその言葉には、子どもに有無を言わせぬ迫力がある。なぜなら、「子どもに勉強させることは親として正しいことをしているのだ」という確信があるからである。

自分は正しいことを言っているという自信のある人は持論を曲げない。なぜなら、

正しいことを言っているからである。しかも相手はわが子なので反論の余地を与えない。

一方、子ども側はこの問答無用の親の押し付けに理屈では勝てないので＜拒否反応＞という形で抵抗する。

勉強をさせたい親と拒否反応を示す子ども、双方の話を聞いていると、共通する2つの特徴があった。

ひとつ目は「親が子どもに勉強を教えた時がある」ということ。そして二つ目は「親も子ども勉強をする意味を理解していない」ということだ

## 「親が子どもに勉強を教えていた時期がある」

塾や家庭教師、通信添削講座など、勉強に関するメニューをいくら並べても成績の上がらないわが子を見て、自ら子どもに勉強を教え始める親は多い。

子どもが小さいうちはまだ親の言うことを聞くし、高い月謝を払わなくても済む。しかし、ここに大きな落とし穴がある。

それは、＜親が子どもに勉強を教える行為は虐待の入口になる＞ということだ。

塾の講師や家庭教師が辛抱強く教えられるのは、赤の他人であるということと、報酬をもらっているからだ。

少々腹が立つことがあってもお金を支払ってくれるお客さんであるので辛抱できる。

成績が悪くても、その子の人生まで責任を負う義務もない。

しかし、親はそうはいかない。

他人の子のバカさ加減は笑って許せても、わが子のバカさ加減は許せない。

他人の子には「いいのよ、こんな計算出来なくても、今は電卓もあるんだから」と寛大な言葉を贈るが、わが子には「あんたこんな簡単な計算もできないの！もういっぺん幼稚園からやり直しなさい！」と容赦のない言葉を投げつける。

この年齢でこんなことも分からないのでは将来どうなるのか・・・という不安が余計に親をイライラさせる。イライラした親は子どもをきつく叱る。

塾や家庭教師なら、子どもは勉強しているフリをしたり、他のことを考えていたり、適当に息を抜くこともできる。

しかし、親とマンツーマンの状況では許されない。わが子の集中力の低下を親は見逃さないし、許さない。

親にきつく叱られると余計に子どもの集中力は低下する。勉強よりも親に叱られることの恐怖に心が奪われからだ。

そうなる親のイライラはますます激しくなる。家事やパートで忙しい時間をなんとかやりくりして勉強に付き合っているのに、ちっとも勉強にやる気の出ないわが子を見ているとつい怒鳴ったり叩いたりしてしまう。

子どもに勉強を教える妻に夫が報酬を支払うということはない。つまり塾や家庭教師のように、教える側のメンタルヘルスを守る「報酬と時間」という枠組みもない。

そうすると、親と子の勉強の時間が、親にとってはイライラの、子どもにとっては恐怖の時間になってしまう。

甘やかされていたり、親よりも子どもにパワーのある場合、子どもは泣いたり、癇癪を起したりしてその状況から逃れることもできるが、勉強の時間が親子ともに苦痛であることに変わりない。

年齢を問わず、人は苦痛なことから逃れようとする。

親が子どもに勉強を教えるという行為は想像以上にエネルギーを使うので、何かと忙しい親が先に根負けすることが多い。

根負けした親はあわてて家庭教師や塾を探すが、一度勉強に悪い印象を持った子

どもにやる気を持たせるのは難しい。

もちろん、親の言うことを素直に聞いて過酷な勉強を続ける子どももいる。

そんな子どもは世間からの評価も高い。「お宅のお子さんは素直に勉強してうらやましいわぁ・・・」なんてことを聞くと、教える親もうれしかったりする。ただ、そんな子ども達の面接をすると、本当は逃げ出たくてしょうがなかったり、チックやパニック症状、他者への暴力行為などの症状を出す子が多い。

### 「親子とも勉強をする意味を理解していない」

年齢を問わず、人は意味の分からない行動を続けることは苦痛である。囚人がシャベルで大きな穴を毎日掘らされて、掘れたらまたそれを埋めさせられるようなものだ。

親はその人生経験から、学力や学歴が高い方が生きて行くのに有利だということを理解している。前述した1から16の強制勉強攻撃の言動はどれもその表れでもある。

突き詰めれば、「生きて行くには、食べて行くには、勉強が一番役に立つのだからとにかく勉強しなさい」ということである。

学歴神話や終身雇用がしっかりと機能し

ていた時代なら、その考え方はある程度説得力もあった。

親が勉強や学歴で苦勞した経験がある場合、その説得は迫力もある。

そういう考え方が社会の主流でもあったので、自分の周りの先輩や友達も理屈抜きでその方向へと流れて行く。

そして大人になって振り返った時、子どもの時に親が無理やりにでも勉強させてくれたおかげで、自分はここまで来れた・・・とか、親が苦勞をして私を学校に行かせてくれた・・・という感謝の気持ちも湧いてくる。

昨年度（2012年）NHKの紅白歌合戦で三輪明宏さんが歌った「ヨイトマケの唄」はそのことをよく表している。中高年の人がこの唄に共感し、感動するのは「親の愛情」「子どもの孝行」「学歴神話」が、いかに日本社会に定着していたかの表れでもあろう。

貧乏な家庭に育ち、「ヨイトマケの子ども、汚い子ども！」といじめられた子どもが、「子どものためならエンヤコラ〜」と自分の為に働く母親の姿を見て学問を志す。

大人になり、「高校も出たし、大学も出た。今じゃ機械の世の中で、おまけに僕はエンジニア」と、自分の人生の成功の陰に母親の愛情と学歴、学問があったことを歌っている。（当時のエンジニアは高学歴、高収入で、現場労働者の憧れでもあった）

「苦勞、苦勞で死んでった、母ちゃんの唄こそ世界一」という歌詞に昭和を生き抜いた人の多くが共感し涙を流した。

<ヨイトマケの唄>

あれから何年 たった事だろ  
高校も出たし 大学も出た  
今じゃ機械の世の中で  
おまけに僕はエンジニア  
苦勞苦勞で 死んでった  
母ちゃん見てくれ この姿  
母ちゃん見てくれ この姿

何度か僕もグレかけたけど  
やくざな道は ふまずにすんだ  
どんなきれいな 唄よりも  
どんなきれいな 声よりも  
僕をはげまし 慰めた  
母ちゃんの唄こそ 世界一  
母ちゃんの唄こそ 世界一  
(昭和41年 作詞、作曲、:三輪明宏)

この時代、他にも同じような唄がヒットしている。新聞配達をしながら家族を養い、眠い目をこすりながら学校へ通い、いつかは学歴で人生の幸せをつかもうとする若者を歌ってヒットした「新聞少年」という唄がある。

<新聞少年>

今朝も出がけに母さんが  
苦勞かけると泣いたっけ  
病気でやつれた 横顔を  
思い出すたび この胸に  
小ちな闘志を 燃やすんだ

(「新聞少年」昭和40年 作詞:八反ふじお 作曲:津島伸男)

<ヨイトマケの唄>の唄の中で、(子どものためならエンヤコラ〜)と汗を流す母親に「なんのために勉強して学校に行かなければならないのか?」と質問する子どもはいないだろう。

「新聞少年」の唄の中で、(小ちな闘志を燃やすんだ)と言いながら早朝に新聞を配る少年に「何のために勉強するの?」と質問する人はいないだろう。

昔は、自ら勉強し上の学校へ行くことは、自分で人生を切り開くことを意味した。

貧乏な親をなんとか助けたいという思いも強かったのだろう。

夜間中学や夜間高校がしっかりと機能していたし、ちょっと前までは、若い頃学校に行けなかった人達が高齢になって夜間中学や夜間高校へ入学するという苦勞と感動のドラマもたくさんあった。

これらのことは、昭和初期から中期における学問や学歴に対する強い憧れや執着を表している。誰にも教わずとも社会が勉強の意味とその効力を保障してくれていた。

子どもが親の学歴を抜き、親の収入を抜いてくれることは、何より親のステータスになり、子どもにとっても孝行の証となった。

当時の子どもの夢は「腹いっぱいかつ丼を食うこと」「カレーライスを食べること」「巨人、大鵬、卵焼き」である。今の世の中、卵焼きを食べることが夢である子どもはいない。親にしても余程の事情がない限り、今晚のごはんに苦勞する人もいない。

「うちは貧乏だから学費の安い公立へ行きなさい」というお決まりの脅し文句も迫力がない。だいたいこういう脅し文句を言わなければならないこと自体がもう迫力がないのだ。

昔の子どもはそんなことをわざわざ親から言われなくても全身全霊で貧乏を噛みしめていた。だから自分が親を助けたいと思ったし、学費も自分で稼ぐのが当たり前だった。郵便局の学資保険に回すお金などなかったのである。

子どもは親を助けたいという習性がある。なんとか学問で親を助けたいと思う子どものモチベーションは低くない。

ところが今のご時世、子どもが親よりも高学歴、高収入になるのは難しい。

新聞配達をして苦勞などしなくてもご飯は食べられるし、学校にも行ける。親の収入さえ安定していれば、誰でも大学にまで進学できる全入時代になった。テレビも冷蔵庫も車もない、毎日食うことで精いっぱい。抜け出す道は学問、学歴。

「よっしゃ、やったるで！」と闘志を燃やす子どもに「勉強する意味」など教える必要はないが、衣食住足りている上に、大学を出ても親の収入を超えられない子どもには勉強の意味が見えなくなった。

「俺が勉強して働いて父ちゃんと母ちゃんに楽させてやるよ！」という子どものハングリーさは自ら生きる幸せにもつながるが、「いいから親の言う通り大学まで行けばいいんだ、金は出してやるから」という愛情の押し付けは、自分で生きているという実感を子どもから奪う。

勉強する意味を見失った子ども達は不登校や引きこもりになり、勉強や学校から降り出した。

あるいは東南アジアの素朴さの中に自分の活路を見出し、日本という国から撤退する若者もいる。

一番あわてたのはそんな子ども達の親だ。ちゃんと大学まで行ける資金や環境を準備したにも関わらず、子どもは親に感謝するどころか不登校や引きこもりという形で世の中から降り出した。

学問を身につけさせて子どもを幸せにしてやるつもりが、なんでこんなことになるのだろうと親は戸惑う。

「頼むから学校へ行かせてくれ」という子どもと、「学問なんぞは役に立たないから働け！」と言っていた親の関係が、親が子どもに「頼むから学校へ行ってください」とお願いする時代になった。

大学を出ても景気の動向によっては就職などないという現実を、子どもに「勉強しなさい！」という親が勉強しなければならないのだが、親は頑なに自分の信念を曲げないし、問答無用で子どもに勉強を押し付ける。

「勉強することに意味がない」という意味を見出した子どもは「何で勉強しなければならないの？」という根源的な疑問を親にぶつける。

親はその問いに答えられない。

### 「勉強アレルギーの方程式」

「勉強が苦痛である経験」＋「勉強する意味を理解していない」  
＝勉強アレルギーの子どもになる

花粉症というのは、花粉によるアレルギー反応である。

その症状は鼻水が出たり、涙が出たり、くしゃみが出たりととても不快なものだ。

勉強アレルギーというのは、勉強によるアレルギー反応である。

その症状は、教科書や机に向かうだけで嫌気がさしてしまう。

スギ花粉アレルギーの人がスギ花粉のまん延する杉山に近づかないように、勉強アレルギーになった子どもは勉強に近づ

かなくなる。

その症状は目には見えないが、言葉ですぐにわかる。勉強アレルギーのある子どもは、勉強を目の前にすると「もうええし」「だるいし」「うざいし」という言葉を連発し、そこから逃げ出してしまう。

こうなってしまってから再び勉強のモチベーションを高めるのは難しい。

「学ぶ」ということは本来楽しいことなのに、学ぶことにアレルギー反応を示す子どもが増えている。

親の貧困や低学歴が子どもの学力低下の要因であるというデータもあるが、昭和を生きた親の貧困と低学歴は今の比ではなかったはずだ。

しかし、今と昔を比較して嘆いてばかりいても仕方ない。

勉強が苦痛である経験をする前に、勉強する意味を親と子に教える方法はないのだろうか……。

このことを考え出したのが「日曜寺子屋家族塾」を始めるきっかけになった。

(次号へ続く)

